

高機能広汎性発達障害の社会支援における 一般市民等の障害理解促進に関する研究

—ドキュメンタリー番組視聴の自閉症児者観への影響とメディア報道の課題—

堀江まゆみ（白梅学園短期大学）

1. 目的

高機能広汎性発達障害の社会支援を考える上で、彼らの地域生活を取り巻く一般市民等の適切な障害理解が必要であることは言うまでもない。しかしながら、昨今、豊川事件や長崎事件など高機能広汎性発達障害が関わった事件がメディアを通して報道されるにおいて、彼らの行動の特性が反社会的行動や犯罪加害と過大に結びつけられ、不適切な高機能広汎性発達障害像が一般市民に流布されることが懸念されている。

そこで本研究では、高機能広汎性発達障害事件に関するメディア報道の課題に関して研究を進めることにした。平成16年度の研究報告では主要な新聞3社および雑誌30誌を調査対象とし、いわゆる豊川事件と長崎事件の記事内容および見だし内容を分析した。その結果、①ニュースの判断基準がメディア側の要因に大きく寄っていること、②事件内容の一部を特に強調して見出しに表現する「ワンフレーズ報道」への傾斜、③精神鑑定報道における不十分な扱い、等、活字メディア情報における影響を指摘した。

そこで今年度は、映像メディア情報に関して視聴における影響の検討を行うこととした。昨今の映像メディアでは自閉症をテーマとしたドラマやドキュメンタリー番組が製作され一般市民からの関心も高い。日本テレビで放映されたドラマ「光とともに」（原作戸部けい子）は同時期の番組（毎週水曜日10時～11時）と並びながら高視聴率を得ていた。また、ドキュメンタリー「うちの子～自閉症という障害を持って」（RKB毎日放送製作）はTBSで放送されて以来、その後も各地の放送局で繰り返し放映されるなど、放送関係者や市民の高い関心を保ち続けている。ドラマやドキュメンタリーの内容は、自閉症児者とその家族が学校や地域社会の中で社会の無理解と向き合いながらも前向きに生きている実生活が描かれており、結果としてポジティブな構成であることが多い。昨年活字メディア情報の分析では長崎事件等に対するネガティブ報道の問題を指摘したが、ではこのような広汎性発達障害に関するポジティブ映像情報は、一般市民の障害理解あるいは広汎性発達障害児者の社会参加に向けてどのような影響をもつのであろうか。あるいは、一方でネガティブ情報を得ながらポジティブ情報により、広汎性発達障害へのネガティブ理解は解消されるのであろうか。

今後こうした活字および映像というメディア間の相違および情報内容のポジティブ／ネガティブの相殺的效果を検証するために、本研究では映像メディアで放映された広汎性発達障害に関するポジティブ情報ドキュメンタリー番組を取りあげ、番組視聴前後の広汎性発達障害に対する理解等について分析することとした。これによりメディア報道が提供する自閉症情報が、一般市民の自閉症理解にどのように関連しているかについて明らかにし適切な報道提供のあり方を検討することを目的とした。

2. 方法

1) 調査対象者：一般市民 61 名を対象とした。

2) 提示映像：自閉症ドキュメンタリー番組「自閉症のわが子へ…奇跡の子育て奮戦記」(2003年7月放映)より、T児のコンビニへの買い物をテーマにした部分の映像(10分間)を使用した。映像は会議室に備わったビデオ用モニターで提示した。

【映像概要】 養護学校小学部に通う知的障害を伴う自閉症T児。家ではTVや幼児番組に強いこだわりを示しパニックも時々おこす。母親は今までの苦勞を語る。絵カードの理解はあり日常生活の中で使われていた。ある時、まだ経験していなかったコンビニへの買い物に挑戦する。途中惑いながらもジュースを買うことができ、家に帰って両親に報告するときには達成感にあふれた笑顔を見せていた。

3) 視聴前後の調査および測定内容：

番組視聴前後の障害観および自閉症に関する態度調査を行った。測定した内容は、①被験者の属性、②障害に関するドラマ/映画の視聴経験、③メディア情報影響度自己評価(影響されやすさの自己評価、8項目)、および、④「自閉症児者観に関する尺度」(生川:2002を参考に自閉症に関する尺度を作成、表1)、⑤「生き方尺度」(板津:1992を使用した。28項目。表2)、⑥自閉症に関する知識(10項目)であった。生川(2002)は障害者観に関し4因子(実践的好意、能力肯定、社会参加、理念的好意)を抽出している。

表1 自閉症児者観に関する尺度(生川:2002を改訂)

【設問】 自閉症の人たちについてお聞きします。次に書いてあることは、あなたの気持ちにどの程度あてはまりますか？(5段階評定尺度)
【実践的好意因子】 3.この人たちと関わりを持ちたいと思う 4.この人たちは自分より立派な面があると思う 14.この人たちが困っていたら自分は声をかけると思う 18.この人たちと友達になりたいと思う 19.この人に関するテレビを観たいと思う 23.この人たちが地域社会で生活することで地域社会にいい影響があると思う 24.この人たちのためのボランティア活動に参加したいと思う
【能力肯定因子】 12.この人たちも周りの人と仲良くする能力があると思う 13.ほかの子どもたちとこの子どもたちが一緒に遊ぶことは良いことだと思う 17.この人たちも学習能力があると思う 20.この人たちも生活に必要な能力を身につけていくと思う
【社会参加因子】 5.この人たちはもっと社会に出た方がよいと思う 6.この人たちも普通教育でみんなと同じように教育をうけるべきである 7.この人たちも一般の企業に就職して働くことができると思う 8.この人たちも子どもを育てることができると思う 15.この人たちも自立が可能だと思う
【理念的好意因子】 1.この人たちの環境を整えるためのお金を国が援助することに賛成である 9.この人たちの働く場をもっと増やすべきである 11.自分の住んでいる地域にこの人たちのための施設が建ってもよいと思う 16.この人たちのことは家族だけでなく社会全体で責任をもつべきである

表2 「生き方尺度」(板津 1992)

【設問】あなたの考えやあなた自身にどのくらい当てはまるか(5段階評定尺度)

- 1.努力をおしまずに、自分のできることに向かって完全燃焼する。
- 2.自分の持っている潜在的可能性を追求しつづける。
- 3.他者との関わりを大事にする。
- 4.過去の失敗をくよくよ後悔しない。
- 5.他人と争うようなことはしたくない。
- 6.自分のやることに最善の努力を尽くす。
- 7.自らを創造・開発していく。
- 8.何事も人間1人の力で出来るものでないから、お互いの協力を大事にする。
- 9.何かに失敗しても混乱したり絶望したりしない。
- 10.周囲の人と利害関係をはなれた付き合いをする。
- 11.時間や物を無駄にしない。
- 12.将来に希望と期待をい込んでいる。
- 13.他人には誠実な心を持って接する。
- 14.事実をわだかまりなく、さっぱりと受け入れる。
- 15.他人をないがしろにしない。
- 16.今という時を大切にす。
- 17.何事も自分のことは自分でやる。
- 18.自分のやるべきことは責任を持ってやり遂げる。
- 19.自分自身にこだわりを持たない。
- 20.自分の欲望のためには他人に迷惑をかけてもかまわない。
- 21.義務や責任を進んで果たす。
- 22.自分のなかに好まない面を見つけたら、隠すよりも良くしていこうとする。
- 23.出来るだけ多くの物事を見聞きしようとする。
- 24.自分自身の行為に自信を持っている。
- 25.何か自分の出来ることに専心する。
- 26.何事にも興味と好奇心を持って接する。
- 27.かけがえのない生命を精一杯生きる。
- 28.自分の良い面は否定せずに素直に受け入れる。

4) 調査手続きおよび分析方法

番組視聴の前後に前述の調査内容を質問紙調査法により行った。

事前調査の質問紙内容は、①被験者の属性②障害に関するドラマ/映画の視聴経験、③メディア情報影響度自己評価、④「自閉症児者観に関する尺度」、⑤「生き方尺度」、⑥自閉症に関する知識であった。

10分間の番組視聴後に事後調査を行った。事後調査の内容は、④「自閉症児者観に関する尺度」、⑤「生き方尺度」、⑥自閉症に関する知識であった。各質問項目を得点化し事前調査との間の有意差について検定を行った。

今回の調査では、①被験者の属性、②障害に関するドラマ/映画の視聴経験、⑥自閉症に関する知識、では被験者間に差は認められなかったため、主に③メディア情報影響度自己評価、④「自閉症児者観に関する尺度」、⑤「生き方尺度」、を中心に分析した。

3. 結果

1) 視聴映像内容と「自閉症児者観に関する尺度」との関連

本調査で使用したドキュメンタリー番組の内容が、生川(2002)が抽出した「自閉症児者観に関する尺度」の4因子とどの程度の関連があるかについて、事前に評定者4人による「内容一因子」一致度から、予備的分析を行った。表3は評定者4人による一致度である。評定者は事前に4因子と質問項目を読み合わせし、因子の示す障害者観について共通の理解を得ておいた。10分間の番組を場面や映像の区切によって14区分に分け、それぞれの区分に関連すると思われる「自閉症児者観に関する尺度」をチェックし、一致度を算出した。関連のあるものについては複数回答とした。

その結果、14場面中7場面で75~100%の一致度が得られた。実践的好意因子2場面、能力肯定因子3場面、社会参加同意因子1場面、理念的好意

因子1場面であり、4因子ともに番組映像の中に含まれることを確認した。

表3 視聴ドキュメンタリー番組の内容分析および関連する「自閉症児者に関する尺度」4因子評定一致度

	場面	T児の行動／親の気持ち／ナレーション	実践好意	能力肯定	社会参加	理念好意
1	花に水やり	T児)じょうろで花に水をやる ナ)自閉症の子どもが持つ独特の世界観、心を通わせる事は不可能なのか？	25%			
2	家族で食事	T児)絵カードで理解 ナ)話し言葉より視覚からの情報に強い自閉症の息子、理解できないからといってただ叱るだけではなく様々なことを息子にわかるやり方で示し続ける。		100%	25%	25%
3	父の職場	父)医師のくせに息子一人も治してやれない自分にはらを立てている。				50%
4	父の車中	父)以前は価値の低い人間だと思っていた要素が高い。最近はそのような思いはない	75%	25%	25%	25%
5	買い物導入	父)コンビニでの買い物経験のために絵カードを作成している	50%	50%	75%	25%
6	T児買い物へ	T児)両親に見送られながら家を後にする ナ)「本人も楽しい」その言葉を聞いて私たちもはっとした。彼らもまた楽しく入り手行ける道がある		100%	50%	
7	T児走る	T児)買い物途中に苦手な犬にあう。避けながらも店を目指す ナ)両親の心配をよそに自分の道をひた走るT児。彼の中ではきっと意味のある遠回り。	25%			25%
8	コンビニ到着	T児)10分後にやっと着く。何度かドアの前に足を運ぶが中に入れない	50%			
9	コンビニ買物	T児)12分後やっと店に入る。迷わずドリンク棚に向かい、さっとボトルを手にする	25%	100%	25%	25%
10	レジで精算	T児)レジに商品を出せないでいるT児 父)いったい何をしていたらそんなに時間がかかる？	25%			25%
11	レジ前で迷う	事情を聞いていた店員が声をかけてくれ、レジで商品を出すことが出来た 父)心配になって塀によじ登る。 ナ)ほんの些細なことで不可能が可能になる瞬間。	100%	25%	25%	75%
12	店からでる	T児)袋を手にして歩いて帰るT児		50%		
13	家に着く	T児)「やったー！できましたあ！」。買い物を無事に済ませT児は玄関先で喜びの声をあげる 両親は無事に買い物を済ませ帰ってきたT児の声を聞いて安心しながら喜んだ。	25%	75%	25%	25%
14	家でビデオ見る	T児)大好きな幼児番組をみて踊るT児 ナ)いつもより心なしか暗れ暗れと見えるT児。テーブルの上のレシートは彼と社会をつなぐ細い絆のように見えました。		25%	25%	25%

2) 番組視聴前後の「自閉症児者観に関する尺度」の変化

表4は、番組視聴前後の自閉症児者観尺度を因子ごとに得点化し、得られた有効データ54人分を算出したものである。7名については欠損値があったため分析対象から除外した。その結果、番組視聴後に自閉症者観の有意な高得点化が認められた因子は、実践的好意因子と社会参加同意因子であった。能力肯定因子と理念的好意因子においては有意な差はみられなかった。

表4 全被験者の自閉症児者観因子ごとの変化

	視聴前	視聴後	差	t検定
実践的好意	3.73	4.24	0.51	*
能力肯定	4.28	4.25	0.03	n.s.
社会参加同意	3.79	4.23	0.43	*
理念的好意	4.23	4.25	0.02	n.s.

Note.* $p < 0.05$ (5%有意) n.s.=not significant

さらに、自閉症児者観尺度項目ごとに視聴前後の差を算出し図1に示した。図中の項目番号は表1の項目番号と一致する。ほとんどの項目で視聴後に得点が増加していた。平均値(0.30)より高い変化を示したのは、「実践的好意因子」の5項目(3.この人たちと関わりを持ちたいと思う 14.この人たちが困っていたら自分は声をかけると思う 18.この人たちと友達になりたいと思う 23.この人たちが地域社会で生活することで地域社会にいい影響があると思う 24.この人たちのためのボランティア活動に参加したいと思う)、および、「社会参加同意因子」の3項目(5.この人たちはもっと社会に出た方がよいと思う。6.この人たちも普通教育でみんなと同じように教育をうけるべきである。8.この人たちも子どもを育てることができると思う)であり、「能力肯定因子」と「理念的好意因子」の質問項目では平均値以上となるものはなかった。

一方、視聴前後にマイナス変化のあったものが「理念的好意因子」の1項目(11.自分の住んでいる地域にこの人たちのための施設が建ってもよいと思う)と「能力肯定因子」1項目(12.この人たちも周りの人と仲良くする能力があると思う)で認められた。

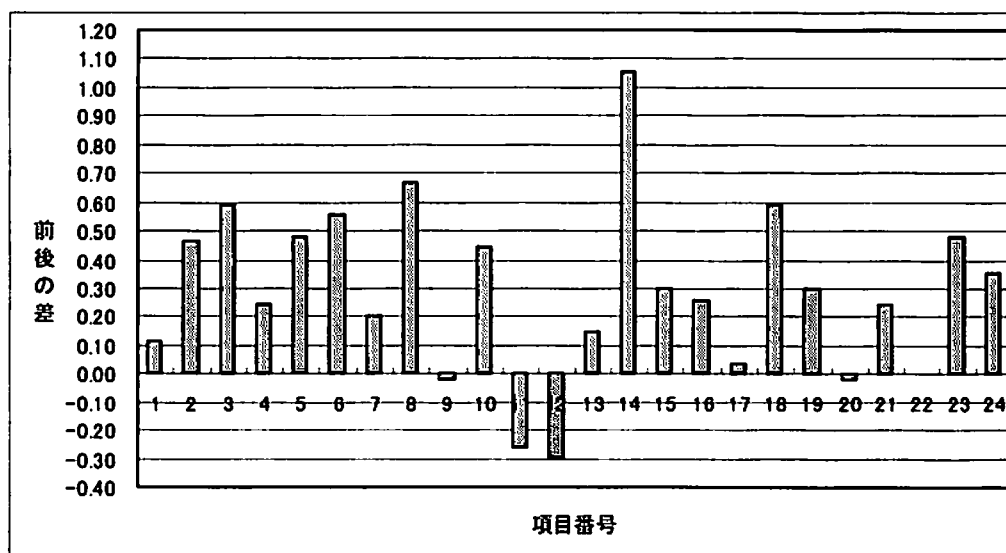


図1 自閉症児者観質問項目ごとの視聴前後の変化

3) メディア情報影響度自己評価と自閉症児者観因子の関連

番組視聴の前後での自閉症児者観因子の変化が、どのような要件から影響を受けるのかについて検討した。まず、被験者自身が自己評価したメディア情報影響度得点との関連を見た(表5)。メディア情報影響度自己評価得点の平均値(3.10)よりも高い値を示した群(高得点群)と低い得点群(低得点群)で比較したが、いずれにおいても有意差は認められなかった。

表5 メディア影響高得点群および低得点群の視聴前後の自閉症児者観変化

	メディア影響		t 検定
	高い群 (n=30)	低い群 (n=24)	
視聴前	3.95	3.94	n.s.
視聴後	4.23	4.24	n.s.
差	0.27	0.31	n.s.

Note.*p<0.05(5%有意) n.s.=not significant

4) 生き方尺度と自閉症児者観因子の関連

次に、被験者の「生き方」に関する尺度得点と自閉症児者観因子の関連を見た(表6)。生き方尺度の平均値(3.44)より高い群を生き方尺度高得点群、低い群を低得点群として生き方尺度各群と自閉症児者観因子の関連を

表6 生き方尺度高得点群および低得点群の自閉症児者観変化

自閉症児者観 因子	生き方尺度		差	t 検定
	高得 点群 (n=28)	低得点 群 (n=26)		
実践的好意	3.93	3.52	0.41	*
能力肯定	4.47	4.09	0.38	*
社会参加同意	4.03	3.54	0.49	*
理念的好意	4.36	4.09	0.27	*

Note.*p<0.05(5%有意) n.s.=not significant

見ると、4因子すべてにおいて生き方尺度高得点群の方が低得点群よりも有意に高いことが明らかであった。

5) 生き方尺度高得点群および低得点群における番組視聴前後の自閉症児者観因子の変化

そこで、番組視聴前後で生き方尺度各群が自閉症児者観因子にどのような影響があったかについてみると(表7)、有意な差は「社会参加同意因子」に認められ、視聴後の変化値は低得点群の方が高得点群よりも高かった。これは生き方尺度低得点群の方が、番組視聴前後で自閉症児に対する社会参加同意に関して、特に好意的な影響を受けたことを示している。

表7 番組視聴前後における生き方尺度各群の自閉症児者観の変化

自閉症者観因子	生き方尺度		t検定
	高得点群 (n=27)	低得点群 (n=27)	
実践的好意	0.56	0.47	n.s.
能力肯定	-0.02	-0.05	n.s.
社会参加同意	0.32	0.56	*
理念的好意	-0.01	0.06	n.s.

Note.* $p < 0.05$ (5%有意) n.s.=not significant

4. 考察

視聴覚情報提が一般市民の自閉症児者観および態度に対しどのような影響を持つかについて明らかにするために、実際に民間テレビ局で放映された自閉症テーマ番組視聴前後の影響について実験的検討を行った。

その結果、番組を視聴した後には、自閉症に対する態度尺度の4因子のうち、実践的好意因子(身近な知人として自閉症者との接触経験を許容する因子)および社会参加同意因子(自閉症児者の社会参加を積極的に受けとめる因子)において有意な差が認められた。これは本実験で使用した番組の内容が、日常生活における本人や親の苦悩および日々のささやかな喜びを映像化したものであり、一般市民にとっても等身大の生き方として写り、隣人としての共感を得たものであったためと考えられた。今回のようなポジティブ映像が一般市民に対して好意的自閉症理解につながることを確認された。

特に、視聴後の影響を大きく受けた要件は、被験者の「生き方」に関連する尺度であった。生き方尺度高得点群では視聴前後で自閉症児者観に大きな差は認められなかったのに対し、生き方尺度低得点群では視聴後に「社会参加同意因子」(自閉症児者の社会参加を積極的に受けとめる因子)で有意な差の好意的変化があった。これは、もともと人生や物事に対し積極的な生き方をしている人(生き方尺度高得点群)にとっては、番組で放映された自閉症児と家族の姿は十分に許容された内容であったため、視聴前後で特に増加することはなかったが、人生や物事に対しそれほど積極的でない生き方をしていると評価された群(生き方尺度低得点群)では、メディア情報により自閉症児者理解が大きく影響を受ける傾向があることを示すものである。

地域社会で生きる一般の市民には多様な思考をもった人たちが存在する。ポジティブな思考の市民だけではないことは自明である。本実験の結果は、特に障害理解に接点がなく、その人個人の「生き方」に明確な方針が比較的薄い層の市民にとって、ポジティブメディア映像が障害あるいは自閉症理解に有効な意味を持つことが示された。このことは同時に、このタイプ市民はネガティブメディア情報に対しても大きな影響を受けがちであることを推測させるものでもある。このような市民層へのメディア影響については、今後とも十分検討を行うことが必要であり重要であると考えた。

本研究では、今回ネガティブな映像の視聴影響については実験を行わなかった。理由としては、一つには、明らかに自閉症児者に対してネガティブ意図をもった映像番組が得られなかったことであるが(このような番組はほとんど製作されないだろうが)、むしろ、仮説設定上、上記の結果が示すようにネガティブ・メディアの情報の大きさが推測しきれず、筆者らの予測の範囲を越えることがあり得るといふ点が倫理課題として残っていたからであ

る。

とはいいいながら、実際には、長崎事件や豊川事件などの報道においてネガティブ情報が一般市民に対し提示されている現実的な課題が目の前にある。本研究の結果から推測するにおいても、人生や物事に対しそれほど積極的でない生き方をしていると評価された群（生き方尺度低得点群）とされる市民においては、これまでの新聞報道を通してネガティブな自閉症児者観を意識的あるいは無意識に形成している可能性は否定できない。早急に実証的な成果をもってメディア関係者や一般社会に伝えなければならない課題である。

本研究班では、また、映像メディア影響分析と同時に、活字メディア情報の影響検討についても今年度準備を進めてきた。活字メディア情報としては新聞記事および見出しの影響について注目し、予備検討を行った。

方法としては、某Q新聞社関係者の協力を得て、新聞紙面の製作にあたる現場記者らにインタビュー調査をし、記事生成過程における基本的ルールおよびネガティブ情報が生成される背景について要件を探った。

その結果、①記事・見出し作成の基本的規則に加え、②基本規則を動かす判断系他が存在し、この過程で上記豊川事件等の記事見だしが作成されることがわかった。特に、新聞記事の作成規則である、①記事・見出しのフレーズ抽出、②見出しの視覚的情報・アピール情報、③紙面における配置、④記事内容の精査と評価、の流れの中に、適宜判断されるトップ記事の入れ替えやデスクの判断、これに担当記者の経験と関心個性が入り込み、記事や見だしの処理に大きく影響することが整理された。

次年度は、実際に模擬新聞記事を製作し、ポジティブ情報およびネガティブ情報の影響について検討を進めることにしている。

5. まとめ

高機能広汎性発達障害の人の社会的行動を地域で支えるためには、一般市民の適切な理解が必要であり、それに対するメディア報道の影響は大きい。報道される映像および活字情報が、好印象情報であるか不適切情報であるかにより一般市民の自閉症および高機能広汎性発達障害への理解や態度が影響され、ついでには、自閉症および高機能広汎性発達障害の反社会的行動あるいは社会的トラブルの受容に、理解の相違をもたらすことにもなるだろう。

TVドラマとして高視聴率を得た「光とともに」「自閉症児は今」などの番組は視聴者に対し、「自閉症児者の社会参加を積極的に受けとめる」「身近な知人として自閉症者との接触経験を許容する」を変容させ、特に主人公と同世代の等身大の生活実態像への共感が好印象を与える影響になっていたと思われる。

今後、映像や新聞記事のメディア各社の作成意図および作成現場の過程を検討し、不適切印象情報が生成されるリスクについて探ることとした。新聞記事の作成過程として、比較的定型の規則である①記事・見出しのフレーズ抽出、②視覚的情報・アピール情報、③紙面における配置は、各社とも大きな違いはないが、非定型的規則である、④毎日のトップ記事の入れ替え、⑤デスクの判断、⑥各記者の経験と関心個性が実際には大きく影響する。今後、この作成過程のどこの要因が記事や見だしの処理に大きく影響し、ついでには「障害＝犯罪」と印象づける記事が生成されるのか、さらに明らかにしていきたいと考えた。